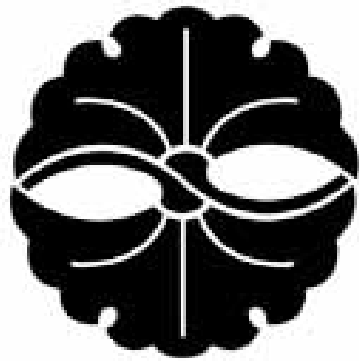




後北条氏家紋
三つ鱗(伊勢平氏流)



大石氏家紋
銀杏の二葉(清和源氏義仲流)



滝山城跡中心

◇散歩のみどころ

今回の散歩は、中世の古城、滝山城址および高月城址と田園風景の滝の集落約2kmの行程で、総てが見所。滝山城址下バス停から大手口に入る。右手に小宮曲輪址、左手に三の丸址を仰ぎ見る。本丸道を進み千畳敷址、馬出し址、喰違い虎口址を見て、永禄十二年武田勢との合戦で攻めたてられた二の丸址に出る。

中の丸から引橋を通り、霞神社、金比羅社、本丸址に着く。西側の眼下には、池址、山の神曲輪址が、北側からは高月町と多摩川が一望出来る。さらに、戻って引橋下の搦手口を通り、伝統行事が残る滝集落から滝山城前身の大石氏が築いた高月城址へ。僅かに土囊や堀が残るのみ。

城址から古刹の圓通寺へ。板碑や空襲で焼けた木鼻などが保存されている。最後に八幡神社に立ち寄り、田園風景の中多摩川縁を歩き、圓通寺バス停で解散。

①滝山城址国

高月町

滝山城址は、八王子市の北端、多摩川と秋川の合流点の南側に広がる「都立滝山自然公園」に残る。滝山城址、高月城址、根小屋城址の滝山三城の一つで、標高百六十mの丘にある。

国指定の史跡滝山城は、戦国時代の中頃、大永元年（一五二一）に武蔵野国守護代の大石定重が、この城の北西一・五kmの高月城から移り築城したものと伝えられる。

定重の子定久のとき北条氏康の支配を受け、その子氏照を養子に迎えて、滝山城は大石氏から北条氏照の居城となった。氏照はさらに城を改築し、当時関東屈指の山城と賞賛される城となった。本丸、中の丸、二の丸、空堀などの巧みな遺構にそれがかがえる。その後八王子城を築き移った。天正の中頃（一五八〇年頃）と推測される。



滝山三城



武蔵名勝図に描かれた滝山城

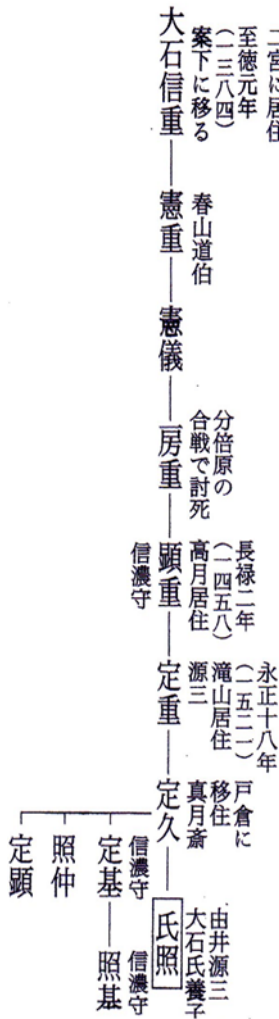
● 滝山城主大石氏

武蔵名勝図会によると、滝山丘陵にすばらしい滝山城を構築したのは、八王子の豪族大石源三定重であった。大石氏は木曾義仲の流れを引く信濃源氏の一族、信濃国大石郷を所有していた姓である。延文元年（一三五六）武蔵に移り、最初居館を設けたのは秋川市二宮。ときに南北朝抗争の戦乱時代であり、情勢の不安から案下の山奥に山城を築き移った。

長禄年間（一四五七〜一五六〇）関東の古河公房対両上杉家との衝突が始まると大石は山内上杉に属し、戦功

大石氏系図（略図）

※伊藤家所伝 木曾大石氏系図を参考



を立てた。案下城は地理的に不便であり、高月城に引越した。当時の領有地は西武蔵五、六村という。高月在城七十余年、大永元年（一五二二）高月の東一・五kmばかり離れた滝山に築城を開始し、中世城郭の典型的な形態をとった。

文明十八年（一四八六）太田道灌が扇谷定正に殺されるや、再び山内、扇谷の権力抗争が復活。この間に明応四年（一四九五）北条早雲が大森藤頼を討ち小田原城を奪取するや、大石定重は北条方に属し、上杉を見限った。

● 滝山城主北条氏照

戦国時代に小田原に本拠をおいたのが北条氏で、三代目の氏康は早雲の孫にあたる。氏康は勢力を今の千葉県から埼玉県まで拡大し各地に城をつくった。

氏照はこの氏康の三男で、今の八王子周辺を治めていた大石氏が北条氏の支配下になった関係でその領地を継ぎ、滝山城の城主になる。その後、八王子城に移る。

天正十八年（一五九〇）、豊臣秀吉によって本拠の小田原城が包囲された時、氏照は主だった武将をひきつれ、兄の四代目氏政とその子氏直（五代目城主）らとともに小田原城にいた。そのため八王子城は城主を欠いたまま、六月二十三日わずか一日で落城してしまった。

その後氏直は高野山に流されたが、氏照は氏政とともに秀吉から切腹を

命じられた。当主氏政はともかく、氏照もこの世から葬らなければならなかった事情には、戦国武将氏照へ高い評価と畏怖（いふ）の念があったといえる。

小田原開城三日後の七月九日、北条氏政と氏照の兄弟は、城下の田村按栖宅に身柄を移されたのち、七月十一日に自刃させられ、その首は小田原で梟首されたのだが、北条氏照の首は、その夜半、何者かが盗み出

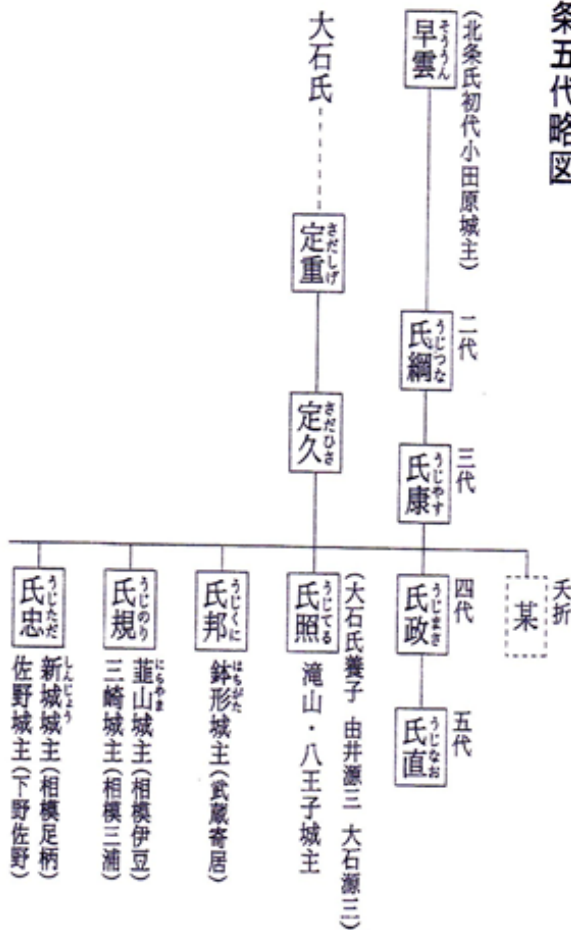


北条氏照「儀列百人一首」

して、のち元八王子の宗関寺に葬られている。体の方は八王子市の由木の永林寺に葬られたとの伝承があるが、青梅市柚木の即清寺には源頼朝、畠山重忠の位牌とともに北条氏照の位牌がある。表面に「青霄院殿透岳宗関大居士」という戒名を裏面には「八

王子神宮寺城主 北条睦奥守氏照」と俗名を記して祀られている。なお、北条氏照が最後を迎えた小田原城下町の田村按栖は日野市にゆかりのある西党日奉氏の一族であった。

北条五代略図



● 笛の殿様 北条氏照

北条氏照は笛の名手であり、様々な逸話が残っている。

・「夕笛」

滝山城在城のころ、梅の里（梅坪村）にて春の宴が開かれた。

比佐夫人を伴っての夕刻、霞が立ち込め、童子が七人現れ一人が吹いたら三分咲き、一斉に吹いたら満開になったという。

・「笛の彦兵衛」

北条氏照の家臣で横笛の名手浅尾彦兵衛は氏照の秘蔵の名笛を預かり、戦場で割り、観音さまに祈願したら満願の日に元通りになった。城主氏照が浅尾の姓を「笛」に改名した。

・「滝山城合戦」

永禄十二年（一五六九）十月、武田勝頼が二万余の大軍で拝島に陣を取り、滝山城を攻略。合戦半ば、秋の名月の夜に彦兵衛のふく笛の音に、甲斐勢は望郷の念にひたり涙した。

● 滝山城に残る戦国哀話

永禄六年（一五六三）北条氏照の攻撃を受け、落城した辛垣城の三田綱秀の娘笛姫は、滅亡後秋川のほとりに庵をつくり暮らしていた。あるとき氏照は狩の帰りに美しい笛の音を聴き、その主を探させたところ笛姫であった。氏照は笛姫を滝山城に招き、一曲の笛を所望した。笛姫は一族を滅ぼした仇敵氏照の隙を見て切りつけたが、氏照は怨讐を忘れて滝山城にとどまるように勧めた。こうして二人の間に愛情が芽生えたと、氏照の妻比佐の嫉妬するところとなり、笛姫は刺殺された。氏照は笛姫の死を

あわれとおもった
い、ねんごろに
吊った。



● 滝山城の主な戦歴

・「天文五年（一五三六）の合戦」

北条氏康に攻められるが屈せず守城した。大石定重は関東管領上杉氏の傘下だった。

・「天文十二年（一五四三）の合戦」

上杉謙信が関東に南下し越後軍に包囲されたが屈せず守城した。滝山城合戦で兵力を消耗した謙信は南下に失敗する。

・「永禄十二年（一五六九）の合戦」

武田信玄が勝頼を寄手の総大将として攻撃し甲斐勢は二の丸まで進攻する。武田勢は本陣を拝島大日堂とし、長槍、鉄砲戦とし、城主氏照は二の丸二階門で采配した。

氏照はこの戦いに滝山城の戦略的不備を体験した。特に小銃戦に於ける不利があり、八王子に山城を築いて移城する方針をとった。

● 滝山城址の特徴

滝山城の主郭は本丸であり、これらの西北部には多くの曲輪群がある。滝山城の特徴は、四つの重層的な防護ラインを持つていること。

第一は、本丸と中の丸の間。

第二は、中の丸と二の丸の間。

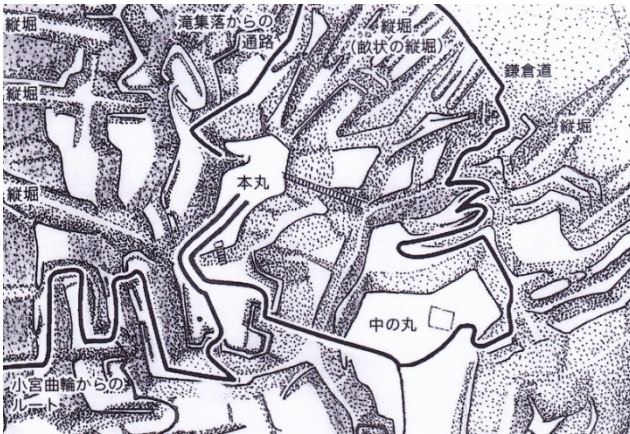
第三は、二の丸の空堀と枳形虎口。第四は、曲輪群を取り込むように最外部防護空堀ライン。



滝山城縄張り概念図

● 本丸と中の丸

滝山城は大小の曲輪の組み合わせで成り立っている。多摩川の崖を利用したのが本丸と中の丸で、滝山城の中心である。



滝山城本丸と山腹の遺構

本丸周囲に小さな曲輪が棚田のように作られている。また山麓に向かって切り落としている縦堀が多くあり、この部分が大石氏時代の古城である。

本丸と中の丸の間には引橋が架けられ、大掘切でもともと通っていた道を人の手で深く掘ったものである。

本丸の出入口は、東に引橋と枳形虎口の組み合わせ、南に枳形虎口と二ヶ所が設けられている。

中の丸の出入口は、西側に一ヶ所枳形虎口が設けられている。

また本丸には井戸も設けられている。



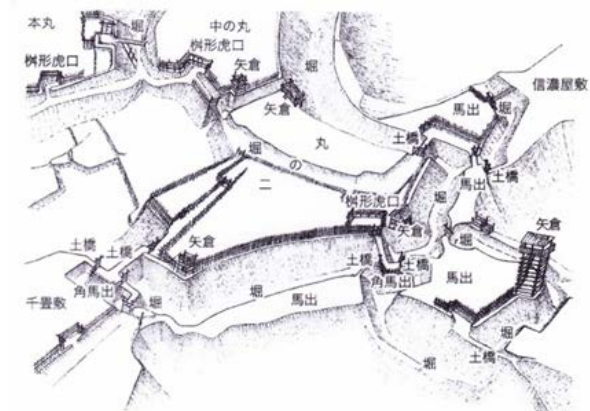
本丸への引橋



本丸の井戸

●二の丸

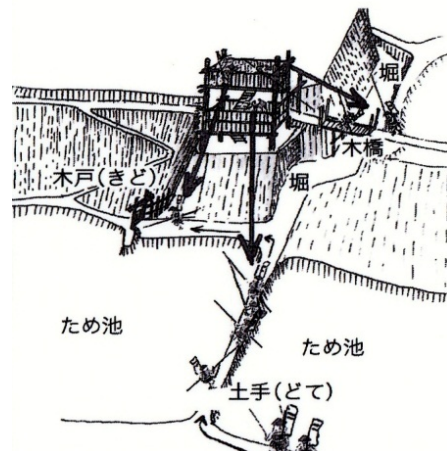
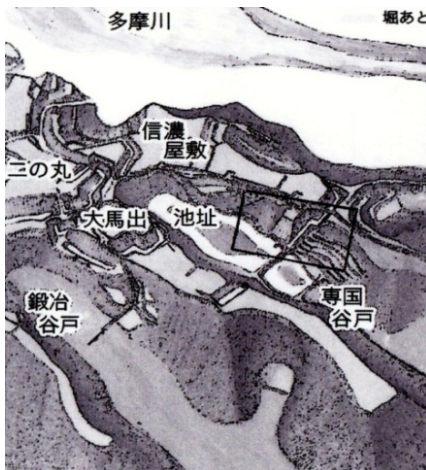
二の丸は、尾根が集まってきているところに作られており、どこからも攻められる場所で、集中防御できるように工夫をして築かれていた。虎口の前に馬出があり、この馬出に数人の兵が配置され少人数で出入口を守り、守りきれなくなったら、兵たちは二の丸へ引きこんでしまう。もし寄せ手が追っかけてきても矢倉から矢、鉄砲、飛礮で援護する。寄せ手が土橋を渡る時めがけて攻撃する。こうした城側からの攻撃は効果的な防護方法であった。北条流の築城技術が生かされた二の丸は城中でも特に防護体制の大事な場所であった。



滝山城最大の特徴
二の丸の集中防御

●信濃屋敷周辺

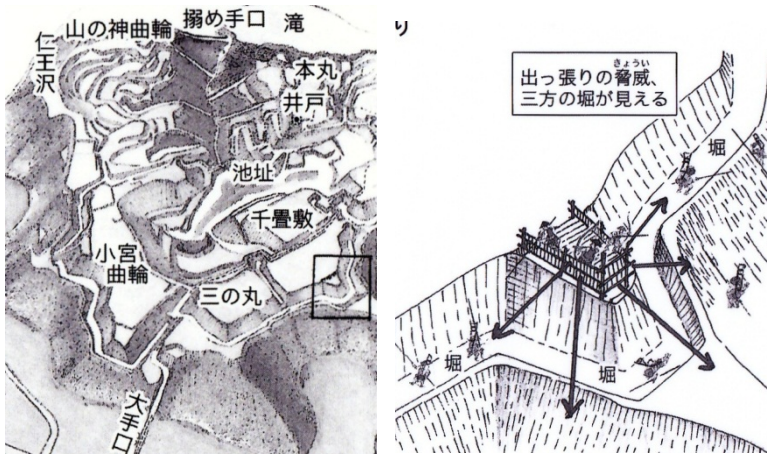
信濃屋敷周辺の曲輪は、角馬出が北側のところにあり、近くに井戸もあった。北側には四段の腰曲輪があり、その下が池である。池は高さ7mの土手によって湧き水を蓄えられていた。



信濃屋敷の周辺

●出張のある曲輪

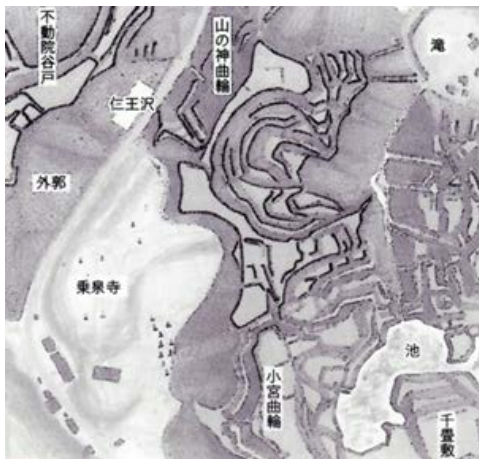
小宮曲輪、信濃屋敷などに堀を見るため、出張りの部分に矢倉を組んでおけば少数で守ることができる。



千畳敷南側 無名曲輪の出っ張り

●山の神曲輪

滝山城の一番北に山の神曲輪がある。その周りは、棚田のような段々があるだけで、堀や土塁といった明確な遺構が何一つないため、昭和二十六年（一九五二）国指定史跡から外されている。



山の神曲輪の棚田状遺構

②金比羅様 祭神 崇徳天皇

創建 文化年間（一八〇四～一八）

滝山城址本丸に昇る数十段の石段の先に鳥居があり、見晴らしの良い一隅に祀られている。古老の伝えるところでは、ご神体は鰻のような杖をついた翁のようであったという。



金毘羅様

この神は、近辺では勝負の神として崇められた。

元々、金比羅権現は、海上の守護神として広く信仰されており、御神体の魚に因んで、願掛けをした人は満願の日まで魚断ちをした者もいるといわれている。

からめてぐち

③ 滝山城の搦手口

滝の集落の東側に城址に登る道があり、これが滝山城の搦手口である。この道を行くと城の中に入り、中の丸、本丸間の引橋のところに出る。右に行けば中の丸、本丸、左手は二の丸を経て丹木に出られる。



搦手口縦堀



辻の地蔵様

④ 高月町滝の地蔵さま

滝ヶ原と滝山城址に別れる三又路の傍に建ち、通称「地蔵さま」の名で親しまれている。初代がこの地に居を構えた大昔、仲の良かった友達の霊を慰めるために建てたと伝えられている。詳細不明の像と合わせて三体建っている。

⑤ 高月町滝の桑の老木

滝には沢井将監の子孫が、旧家としてあり、その庭先に一本の桑の老木がある。樹齢四百年と推定され、太い幹から枝をたれている。八王子の「桑都」の名の由来は、この桑の老木といわれ、市の天然記念物に指定されている。

北条氏照は産業開発にも意をそそぎ、城下の民に桑を植えさせ蚕を飼わせ、糸をつむいで布を織らせたといわれるが、その名残をとどめる一株である。



樹齢400年の桑の老木
（「八王子桑都」由来の桑木）

⑥ ホウドブさま

これを邸内に祀る家（シモエ・シモウエ）で、何代も前からの伝えによれば、病で倒れた僧をこの家で長い間介抱したが手厚い看護の甲斐なく亡くなった。臨終の時この僧は耳病治療の祈願方法などを教えて息を引き取ったという。

ここの墓碑に「宝蔵院権大僧都海光法印延宝二年（一六七四）四月没」と記されている。



耳の病を治すホウドブさま

これより二十八年程前にあたる不動明王社造立の棟札に記されている「宝蔵院海光」と同一人物といわれ、比較的高い僧であったことが窺える。供えられた竹筒に井戸水を入れて帰り、こよりでこの水を耳につければ耳の病気はなおるといふ伝えがあった。最盛期には近郷近在から信者が集まってきたが現在は訪れる人は少ない。

⑦ 高月町滝の不動院

本尊 不動さま

創建 正保三年（一六四六）

新編武蔵風土記稿には、「不動様高月村の界にあり」と記されており、現在の駒形神社の境内にあった。神仏同体説等により、寺を建てた後に境内に鎮守を奉り、後に現在地に移転した古寺である。

御本尊は、高さ一尺五寸、坐像の不動さま。無住で高月本村の圓通寺持ちである。



女衆が建てた地藏さま



高月村の古寺 不動院

●地蔵さま

不動院の入り口に小さな六地藏と並んで建つ。不動院の住職として勤めていた若い僧が何かの不都合なことを犯し処刑された。この僧の霊を慰めるために信心深い滝の女衆が建てたのがこの地蔵さまである。

「文久四年（一八六四）為宥同菩堤明治三年（一八七〇）八月 建女念仏講中」とある。

●他の石仏

青石塔婆 不動院保管

正和四年（一二二五）

六字名号塔 不動院入口

南無阿彌弥陀仏、寛政九年（一

七九七）寒念仏供養塔

念仏供養等 不動院入口

念仏供養、寛政九年（一七九七）

念仏供養塔 不動院入口

念仏供養、文政九年（一八二六）

馬頭観音 不動院入口
弘化五年（二八四八）



不動院入口の石仏

⑧高月町滝の駒形神社

祭神 大己貴命（おおなむちのみこと、別名大国主命）

不動と駒形の二つの名前を持つ神社である。

滝集落の西端、高月本村に近い坂の下にある神社。年配の人は「オミヤ」または「オフトウサマ」と呼ぶことが多く、正確な名称である駒形神社

社と呼ぶ人は少なかった。建立年代不詳であるが、棟札で調べると寛文三年（一六六三）不動明王社。約百年を経た宝暦十二年（一七六二）の札には駒形大明神と記されており、仏教の本地垂迹思想による神社である。この神社の本地は不動で、身の丈八寸といわれる。除地五畝。駒形神社は農耕・牧馬の神である。宮下、留所方面から高月本村へ、また滝集落に出る三又の場所にあり、老杉古木におおわれている。



二つの名前を持つ駒形神社

●天王様

文化十一年（一八一四）六月十五日衆病悉除、心身安楽、増長福寿を祈願として、「駒形神社」境内に勧請された。

●ヤクジン様

通称「ヤクジン」の地名を持つ区域の水田の端に、数坪の「イシマ」の畑ともつかぬ土地があり、昔は祠が建っていた。太平洋戦争中食料増産のため、駒形神社境内に祀り換えてその跡は水田になった。十一月八日には、ご馳走をつくった。

●山王様

昔、タカアラ（屋号）の先祖が大洪水の直後、多摩川と秋川が合流する辺りの河原で人形のようなものを二

つ拾い、持ち帰り子どもに玩具として与えた。ところが、その子どもが間もなく高熱を出し三日三晩苦しんだ。祈祷師にみて貰ったところ「上流の山王様が洪水で流され、滝の河原で拾われたのは二十数体ある祭神の一部である。他の流された祭神がその付近に埋まって苦しんでいるからそれを掘り出して祀れば子どもの熱は下がる」と告げられた。

早速河原を掘り探したところ、前に拾った二体を含めて荒削のコケシのような二十数体と、猿その他の動物の焼物等で一部分破損したものが見つかった。

これを屋敷の端に祀ったのが滝の山王さまのはじまりと伝えられる

●せえのかみ（塞の神）

（道祖神、幸神、妻神、障神、斎神）土地の言葉で、「せえのかみ」と

いわゆる神様が正月七日の朝「年番」の人によって建てられる。長い竹竿の先に大型の幣束と、末広三本を広げて丸型に結えたものをつける。

この神の機能は、主に縁談と出産に関するもので、この幣束等は完全に固定されていないので幣束、末広などの向きが動くことがある。その方向に当たる適齢期の男女には良い縁談があるとか、妊婦には良い子が生まれるなどと語り伝えられている。

神の姿は、正月の鏡餅に敷いた半紙を使い、幣束の下端に竹竿に直接末広三本を丸型に結びつけ、三又の道端に建てる。「二十日の風を当ててはいけない」との言い伝えで二十日朝壊す。



滝のセーノカミ

● 福の神

福の神当日（七日）集合した参加者は預けておいた装束・道具を身につける。最年長者が福俵と会計を担当し、これ以外の者は背負い紐をつけた輪飾りに赤子を背負うように背負いカチカチを手を持ち各家を回る。

各家の前で全員が、「福の神が舞い込みました」と唱え、家の人が縁側のガラス戸や障子を前もって開けておく庭側から「恵方から福俵、貧乏神祓い出せ、福の神を祀り込め」と全員で何遍も唱えながら、福俵役は福俵を座敷の中へ投げては返しこれを繰り返す。他の者はカチカチを叩きながら繰り返す。

家の人からオヒネリを貰うと会計の逆づりダルマにいれ、一同で礼をいって次の家に向かう。

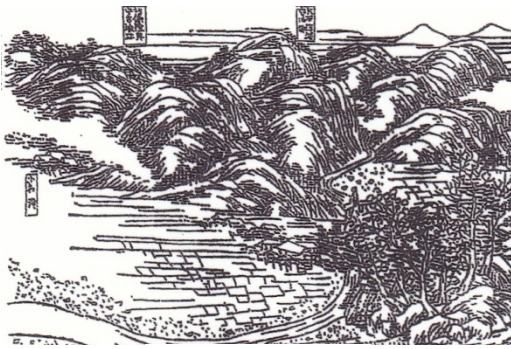
オヒネリは学年で差をつけて全員に分配する。



正月飾りを背中に背負ってさあ出陣



俵を腰に結わいつけ、座敷に投げ入れる

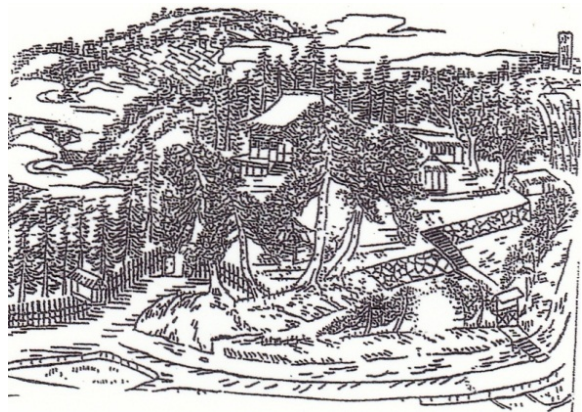


高月村周辺図

●高月村の昔

新編武蔵風土記稿によると、「この村は丹木 留所 宮下という谷治庄の三ヶ村より山を越えて 北の方の秋川と多摩川の端にて この村附きの地にて秋川は多摩川へ落ち入る秋川は東より始まり この地より西の方桧原村まで秋川兩岸の村は凡そ二十ヶ村程あり その地を阿伎留郷と号す

さらば 本命は阿伎留川なるをいまは秋川と称するなり 高月と書くは中古以来のことなる由 昔は高築とも書きたる由なれど 往古高槻村と書きたること本来の文字なり その謂われは 当村の鎮守八幡宮の社地に槻の大なる社木一株ありしこれを村名に称したといわれている」



圓通寺境内図

●丘墟

新編武蔵風土記稿によると、「村内の東寄りに古城あり 西の方は秋川に接し 東は滝山つづきなれども 谷間をへだて弧山なる城跡にて 高さ三十四、五間余 北は多摩川の流水下をめぐらして 東北は武蔵野の平原を展望する絶景の地なり 山上に堀切二、三ヶ所ありて 平地のところは畑となし、東北に多摩川の方に差し出たるは悉く松山なり その崖下は圓通寺境内となり 堂舎は山の麓に接せり いまは高月村の地なれども 古文書並びに記録などに高月城と号していた この地は大石氏が代々の居城にて 准后道興法親王もこの城に來たり給いて 武蔵野を瞻望し 絶景と賞せられ 詩歌などを詠ぜられしは当城のことなり」

⑨高月のかな穴

高月町

圓通寺の東側に南の山にかけて古道がある。その山道にかかる前の右手にぽっかりと穴があいた入口があった。この入口を西の方に入っていくと長々と穴がつづいていて、壁の面には鍬で掘ったときの跡を残している。突き当たったところが圓通寺の裏手あたりと思われる。

この穴は「かな穴」と呼ばれ、高月城の抜け穴とか、金鉾を探した場所ではないかといわれ、穴の目的は不明である。

⑩十二曲りと峰の地蔵

高月町

かな穴の入口のところから南の山に十二曲りの山道を登ると頂上からは宮下、留所の一部が見えるが、も

ともとこの道は高月圓通寺を中心とした修験道の人達の道であった。

頂上近くに木製の鳥居があり、二、三の古碑と地蔵堂がある。これが圓通寺の奥の院で、峯の地蔵さまと呼ばれ親しまれ、延命地蔵尊が祀られている。平安時代智證大師開眼の尊像と伝えられ、関東一円に講中信者があり

参詣の
人が絶
えな
かった



地 蔵 堂



入口の峰の地蔵さま

⑪ 慧日山観音院圓通寺

高月町二一五八

宗派 天台宗。

本尊 聖観世音菩薩

寺宝 聖観世音菩薩（定朝作）

峯地藏本尊（石造） 知証大

御開帳の尊像 延命地藏

菩薩（白蛇地藏吉祥）

開山 讃海阿闍梨

開創 延喜三年（九〇三）

慧日山観音院圓通寺は、高月城下にある天台宗の古刹である。

寺伝によると、醍醐天皇の御代延喜三年（九〇三）に叡山延暦寺西堂の法祖恵亮尊者大楽大師従弟讃海阿闍梨が開祖と伝えられている。

もとは武相二十八ヶ寺の本寺として古御朱印観音領百石、外に拝島村大日領二石を兼帯、境内三万坪余を有した大寺院で、天正年間（一五七三〜九二）高槻城主大石氏の深い帰

依を受け現在の地に定住した。

終戦直前の昭和二十年七月、米軍艦載機の爆撃で堂塔伽藍一切を焼失、現在の伽藍現住第三十七世光亮代が完成したものである。本尊は、秘仏聖観音菩薩（木刻坐像、二尺三寸）で平安時代定長の作といわれている。本堂内陣の御厨子内には、当寺奥の院の地藏堂、通称「峯之地蔵尊」と呼ばれ親しまれている延命地藏尊の分身（磐座に白蛇の彫刻がある）が安置されている。



焼夷弾で黒焦げになった
一対の木鼻



圓通寺扁額



圓通寺



観音堂



鐘撞堂



戦争で焼けた桜



現在庭にある桜

●東照宮山王社

圓通寺境内にあり、東向。又境内に
元和二年三月八日と読める碑がある。

●塔中興善院

除地五畝、村の中ほどにあり、本尊
伊勢至座像にして長一尺。客殿六間
半に四間。

●大善院

除地六畝二十歩、圓通寺の後の方に
ありて則ち同寺の末なり。開山は不
明。本尊彌陀の座像にて長一尺八寸
程。客殿七間に七間半

⑫ 加住小学校高月分校跡

圓通寺の前に加住小学校高月分校跡がある。校門に赤れんがを積み上げた角柱が立てられていたが、圓通寺焼失の空襲で機関砲の弾丸が柱を貫通したといわれその痕跡が残されていたが現在はない。
裏に九龍頭社が祀られている。



加住小学校高月分校跡

⑬ 高月の八幡神社

高月町一一九七

新編武蔵風土記稿によると、「村内の鎮守 神体木立像 本社拝殿 雑木の森あり 同所興善院持 この社地に往古は槻の古木ありて 高く聳えたる社木ゆえ 土人村名に唱え来たれる由 それより高槻村とは号せしという また 大石信濃守顕重は長祿二年（一四五八）三月高槻に移り居住すと かの家のことを記せし書に見えたり されば 長祿の頃より高槻村と書きたるにや その古木は中古までありけるが 村内の圓通寺を造営の砌に伐採 この槻一本にて本堂 庫裡に至るまで再建の材に用いたという 社内の地に古碑一基あり 薄い板石 長さ二尺余 幅九寸程 上に弥陀の梵字一字あり その下貞和五年（一三四九）六月とあり 弥陀八幡を祭り 本地としてこの碑石を造立せしものなり」



八幡神社内部



八幡神社

槻（つき）は櫟の一種、つきけやき。

かんめいしや ぐんだりし
● 関明社と軍荼利祠

高月城の北麓に齋藤家があり、その家の前あたりの山に「せき神さま」と呼ばれる関明社と軍荼利さまの祠がある。「せき」とは川水をせき止める柵のことで、堰という漢字がある。いわゆるダムのこと、川から水田用水を取り入れるための水をせき止める施設をいうがせきが関に通じる。

軍荼利祠は、軍荼利夜叉を祀っているが、この神は明王の一つで南方を守る神である。かつて軍人が兵役に出るときに参拝した。

● 護衛艦「たかつき」

海上自衛隊の護衛艦「たかつき」は、当時防衛庁長官であった福田篤泰氏によって命名された。福田氏は自分の選挙区であったこの地に良く

来られ、高月を思い出して「たかつき」と名づけた。艦内に「軍荼利さま」が祀られている。



軍荼利明王



護衛艦「たかつき」

● 高月のお田植祭

高月地区は、八王子市では珍しく一面の田園風景が広がる。

五月下旬より田植えが始まり、子安神社のお田植祭が行われる。

田の害虫や雑草の駆除に合鴨を使って無農薬農法が行われている。この地の米を使って八王子産の銘酒も造られている。



田 植



神事



田 植 祭

神職

⑭高月城址

高月城は、大石氏の城である。

大石氏の先祖は木曾の源義仲といわれ、足利時代末期から武蔵目代として上杉氏に仕え、埼玉地方から多摩にかけて勢力を持った武将である。

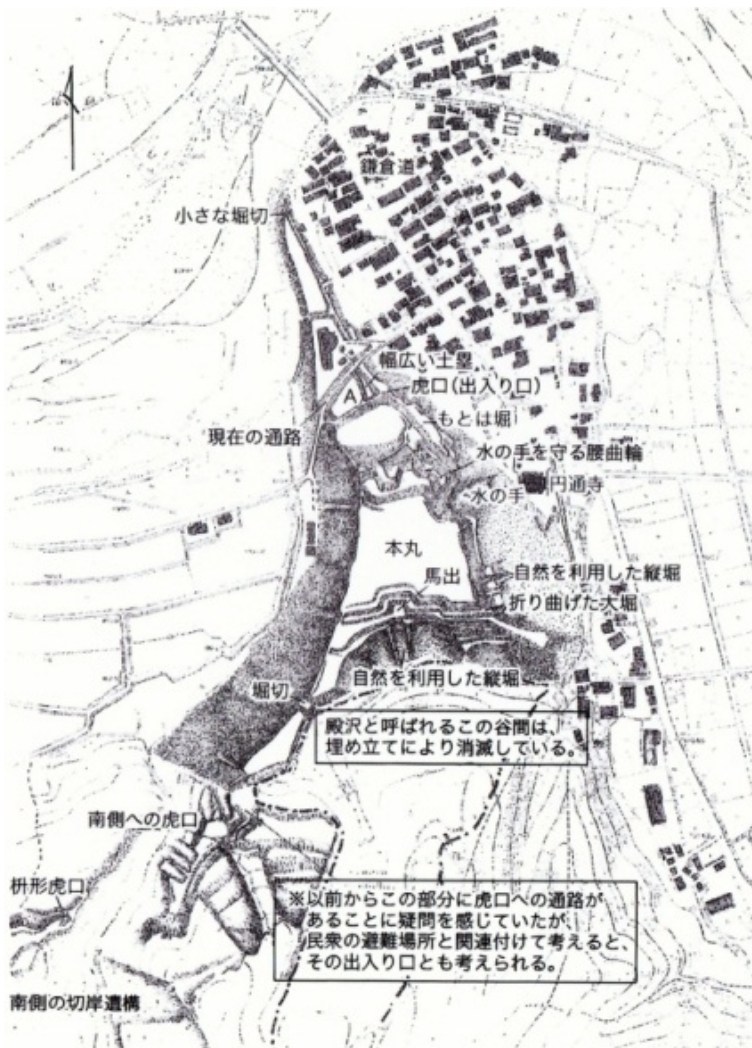
十三代定久は戦国末期の頃には二の宮（秋川市）からこの地に移って近郷三十五カ村を領したという。信濃佐久近くの大石郷から出たとも伝えられる。由木の永林寺裏山の由木城も、恩方の浄福寺城（新城とも案下城とも呼ばれた）も大石氏の居城であった。

長禄二年（一四五八）、十二代信濃守頼重が高月城を築いてのち、大永元年（一五二二）その子源三定重が滝山城を築いて移ったが、同七年（一五二七）十二月その子源左衛門尉定久に伝えた。

高月城は、鎌倉道が多摩川を渡ろ

うとする位置に築かれた。古河公方と両上杉氏が、対立していた時の戦略であった。高月城は、秋川が南から西に沿って流れ断崖を作り、空堀、土居、石垣も若干残っており、本丸、

守殿跡、外曲輪と思われるところもある。現在の圓通寺およびその塔中なども城域の一部であった。



高月城全体図

◎主な参考資料

- ・新編武蔵風土記稿
- ・武蔵名勝図会
- ・滝の民俗資料 澤井栄著
- ・八王子ふるさと風土図 霞よし穂著
- ・よみがえる滝山城
- ・八王子寺院めぐり八王子仏教協会青年部
- ・園通寺資料
- ・関東路百八地藏尊霊場めぐり
- ・多摩川絵図 今尾恵介著
- ・八王子市郷土資料館資料
- ・昭文社
- ・八王子市地図
- ・八王子市観光マップ

ーメモー